

29 GIFT法の改良とその検討

越谷市立病院産婦人科，順天堂大学医学部共同病理研究室*

田中 温，戸枝通保，長沢 敢，山本 勉，
中潟直己*

〔目的〕GIFT法(配偶子卵管内移植)はマイクロサージェリーでも開通できない両側の卵管閉塞以外の全ての不妊症が適応となりうる治療法である。同法を1984年6月より臨床に応用してきたが妊娠成功率は1割程度であった。今回我々は採取卵に体外培養を追加した後にGIFTを施行するという新GIFT法を開始し，妊娠率の向上に成功したので報告する。〔方法〕従来のGIFT法は採卵10～60分後に媒精を行ない卵管内に移植した。今回我々はマウスを用いた動物実験で卵胞卵を培養した後に体外受精を行なうと受精，卵割率が著明に上昇するという結果のもとに，ヒト卵胞卵に前培養を追加しGIFTを施行した。ヒト卵胞卵の前培養時間は卵の成熟度の差により4～20時間とした。〔成績〕①1986年4月より同年9月前半までの間に新GIFT法を28例施行し12例の妊娠に成功した(妊娠率43%)。12例の中には2例のchemical pregnancy，1例の卵管妊娠を認めた。9例の妊娠継続例の中には双胎3例，品胎1例を認めた。②妊娠群，非妊娠群における平均採卵数，平均G₁数，平均G₁+G₂数はそれぞれ4.1，2.0，3.9および2.2，1.2，1.6であった。③妊娠群，非妊娠群における液化精液中精子数，精子運動率，媒精時精子運動率および精子数の平均はそれぞれ $39.1 \times 10^6/ml$ ，46.3%，63.6%， $41.1 \times 10^4/ml$ および $67.5 \times 10^6/ml$ ，45.0%， $30.6 \times 10^4/ml$ であった。〔結論〕GIFT法で高い妊娠率を得るには①採取した卵胞卵に前培養を行なう，②成熟した卵胞卵を多数採取し，複数個の成熟卵を移植する，③媒精時の精子運動率を高めることが必要であることが判明した。さらに本法では体外で成熟を完成したと思われる卵と精子とを卵管内に移植するために多胎妊娠の発生率が高い傾向をますとともに卵管内妊娠を1例認めた。

30 配偶子卵管内移植による妊娠32例の検討

東海大学産婦人科

小林善宗，井上正人，本田育子，内村道隆，
淡路英雄，宮本 壮，宮川和子，松山毅彦，
藤井明和

〔目的〕不妊症検査の進歩により，難治性不妊の適切な診断が可能となり，それに対応したより有効な治療法の選択は重要な課題である。最近，配偶子卵管内移植(GIFT)が，卵管疎通性を有する難治性不妊に対する新しい治療法として注目されている。今回，当院におけるGIFT妊娠症例の詳細を分析することにより，GIFTが有効となりうる不妊原因の解明と，GIFT妊娠の予後について検討した。〔方法〕S.60.3～S61.7間のGIFT妊娠32症例(原発性不妊26例，続発性6例)を対象とし，主たる不妊原因のうち，卵子pick up障害(卵管形成術後)，男性不妊，子宮内膜症，卵管内精子輸送障害について分析し，さらに妊娠の予後を検討した。〔成績〕対象の平均年齢は，32.8才(27～38)，平均不妊期間は，7.8年(3～14)であった。2つの不妊原因を有するものが10例(31%)，3つを有するものが9例(28%)，4つを有するものが1例(3%)であった。卵子pick up障害は20例(63%)に存在し(microsurgery後4例，laparoscopy下卵管形成術後16例)，男性不妊は15例(47%)で9例が精子受精能力異常を伴った。子宮内膜症は18例(56%)で，修正アメリカ不妊学会Ⅰ期9例，Ⅱ期4例，Ⅲ期4例，保存手術後1例であった。卵管内精子輸送障害は10例(31%)に存在した。平均2.8個(1～6)の成熟卵子を移植し，双胎6例(19%)，流産7例(22%)，子宮外妊娠3例(9%)であった。現在17例が分娩し，19人の健康な生児を得ている。〔結論〕GIFTは配偶子が卵管内に到達できない不妊原因に対して有効であった。また精子受精能力異常を伴う男性不妊に対しても有効であった。